

「豊前・筑前其他出土考古品図譜」
の関連および追加資料

三 島 格

1 はしがき

本研究報告第3集において、本館所蔵の「豊前・筑前其他出土考古品図譜」（以下・図譜と略称する）について、若干の解題を施したが、その後多少の補足・修正を加える必要を生じ、かつ類似する新資料を得たので、併せて以下の項目に従ってのべる。

2 図譜の著者について

拙文において、原記録者の像として、著者をめぐる収録上のいくつかの要素あるいは環境をあげ（P. 6）、それらの諸条件の中で、もっとも可能性の高い人物として、その当時「東京人類学会雑誌」に精力的に発表していた小川敬養氏の名をあげ（P. 7・追記3）、追跡すべき人物とした。

発表後、渡辺正気氏は図譜 P. 247所収の石鏃2箇の欄の記事の項に「小川君之恵送」（註1・P. 12）とあるのに注目されて、図譜の著者は小川敬養氏ではないのではないかとの意見を筆者に示された。拙文執筆時において、この小川君が小川敬養氏であるのか否か、一抹の疑念を抱いたが、図示石鏃の出土地を飛州とする点をより重視して、在飛州の石田氏であろうと解し、あえて本文では言及することを避けた。けれども小川敬養氏の明治20年代の東京人類学会雑誌における、旺然たる活躍（註2）—主として豊前地方における遺物・遺跡の発表—を、多少なりとも知っていた筆者は、本図譜所収の遺物が豊前国に集中（註1・P. 2）する点を留意して、前記のごとく追記の形をとって、要追跡の表現となったのである。さらに下條信行氏の教示により追記2で指摘したように、同一遺物が図譜と小川氏報文（註1書の註15 註2—13）に認められ、後者つまり小川氏は「……余の所蔵となる」という表現がある点も気になる点であるが、月日が合わない点をも付加した。

小川氏が在飛州と考えない立場に立てば、「小川君之恵送」の6文字をもって、本図譜の著者が、小川敬養氏でないことの一つの重要な証左となる。前記渡辺氏の見解がこの立場に依拠されることは、いうまでもないことである。同姓異人ということも考えられるが、約1世紀を隔した現在、困難な作業であろう。試みに図譜および15編におよぶ小川氏報文に見られる人名を検索したが、小川姓はなく、逆に双方に登場する複数の人名（この場合、友人もしくは協力者というべきであろう）を検出し得た。双方が同時代とはいえても、著者名は限定できない。

その後、図譜の著者を小川敬養氏とみることに、不利と思われる点を見出したので、以下私見をのべる。図譜の作者をX氏とよび、X氏と小川氏との諸条件の対応を見る。

①すでにのべたごとく、両氏の採集・発掘品の出土地は、豊前が圧倒的に多く、対応する。

②両氏の活動年代。両氏の生没年次を明かにできないが、明治20年代が両氏の研究活動の高揚期であったことは、対応。

けれども、仮りにX氏が小川氏であるとする、

③X氏は、自己の図譜中に関連諸書からの抜萃（例えば、桂園漫録・考古説略・日本石器考・東京人類学会雑誌など 註1・P. 8—15目録参照）を行ない、それらを明示して図示する。X氏を＝小川敬養氏とすれば、本論註2に記す小川氏の東京人類学会雑誌で使用了遺物図が図譜に使用され、かつ同誌の巻号なども示されるべきであるのに、遺物図は一例（註1書の註15、註2—13）を除き明らかでなく、さらに同誌は引用されているものの、巻・号は対応しない。

という、不整合な点が指摘できる。以上、やや冗長な記述をつづけたが、要するにX氏の解明は上述6文字中の小川君を、非小川敬養氏とみるか、小川敬養氏とみるかに、限定される。それぞれ対応・非対応面があることをのべた。断定はつつしまなければならぬが、私見では、小川敬養氏とは重複する時代であるものの、非小川敬養氏つまり同氏とは別人ではないかと、図譜の著者について考える。後述する筆跡鑑定の結果もこれを支持する。

3 山田新一郎氏資料

本項で報告しようとする資料は、昭和54年12月末近く、井上忠氏より斎藤豊氏を經由して届けられた、3葉の遺物図（写真1—4）である。その折、井上氏が秋月出身の山田新一郎氏旧蔵の「筑紫史談」を某古書肆より購われた際、その中に混入していたものとの、教示をも併せていただいた。これは筆者が前述図譜のX氏を探していることを知っておられての御配慮である。

恵与を受けた三葉については後述するが、まず問題となるのは、旧蔵者が山田氏であっても、三葉ははたして山田氏の筆になるか否かの点である。この疑問を解くべく井上氏の教示により秋月郷土館の三浦末雄氏に連絡をとり、さらに三浦氏により朝倉郡三輪町弥永在住の田辺正彦氏を紹介され、55年1月17日田辺家を訪れた。以下必要事項を簡記する。

①三葉の遺物図に註記された文字について。明治・大正にわたる発信人山田氏の葉書数葉を示されながら、伯父山田新一郎の文字であると、明言された。

②図中の鈴（写真1）は現存し、実見し手に取ったことあり。現在は三輪町の大己貴神社に納められている。

③文字はまちがいないが、伯父に絵心の嗜みがあったとは知らなかった。三葉の図は初見であり、考古学的な興味があったことも知らなかった。

三葉の遺物図は、ともに24×16.7cmの画用紙に描画されたものであるが、鉛筆で実大の図取りをした上に、絵具による彩色や淡い墨状の絵具で陰影が施されている。この着色の点は、上述図譜所収の遺物図と大きく異なる点であり、さらに註記の文字の書体については、前福岡県警犯罪科学研究所員宮本聰氏の指摘によれば、両者は異質ではないかとの教示を得た。

写真1 「駅鈴 福岡県朝倉郡三輪村久光俗に馬塚といふより発掘 大正五年八月記 大正五年如月写之」のインク(以下同)による註記があり、中央に当該鈴を示す。左下に「次」の書き入れがある。

写真2 「朝倉郡夜須村大字吹田にて原野開墾の節採取 吹田の古墳よりは石棺を出したること度々なり」の註記。左端に「秀」の書き入れあり。付記 註記文の節の次に「別図三品と共に」と書き縦線により消去。この消去は図3の裏面(山田氏により全面抹消)の註記にも認められる。残存長約14.5cmを測る石剣の破片である。

写真3 「此三品は福岡県朝倉郡夜須村大字松延、溜池の側の突出部平地より出つ(此原には大なる塚あり)」と註記し、石庖丁・磨製石斧・紡錘車(土器片を利用したものか?)を図示。上 長10.8cm 右 長9.6cm 左 径5cm。右下に「秀」の書き入れあり。付記 石庖丁の傍に鉛筆による「地方にては石庖丁といふ」の書き入れをなす。

前述のごとく、本図の裏面には上記三箇の未完成の描画(写真4)をなし、×印をもって全面消去。註記文も大差ない。但し、表には認められない「所有者 朝倉郡 栗田」の書き入れがある。

図2・3のごとく、弥生時代の遺物に注目し図示した人は誰であるのか。註記者は山田氏であることは明かになったが、図を描いた人はさだかではない。筆者は根拠はないものの、註記とともに図を書いた人も、山田氏ではないかとも推定する。傍の秀・次の書き入れも描図者のサインであるのか、解決できない。僅か数個の遺物を複数者に依頼することは、不自然であろう。それはさておき、描図者が山田氏ではないと、仮りに百歩を譲っても、山田氏の意図によりなされたとみることは妥当であろう。筆者はこの点こそ評価さるべき点であると考える。

図1の紀年により、それらが正5年になされていることを知る。中山平次郎氏が「太刀洗飛行場発見の石剣 附大川附近辻出土の磨製石鏃に就て」を考古学雑誌(註3)に発表されたのは、正10年である。また坂本真鈴氏による「朝倉通信」(註4)も正15年以降である。文字通り朝倉地方の考古学研究の、先鞭をつけられた人であったと、いえるのではあるまいか。ただ残念ながら、山田氏をして好古の念に走らしめた、背後の事情については、追究する材料も力もない。けれども天性の探究の資質があったろうことは十分に考えられる。ここにそれを示唆する小さな資料がある。早く東京に出られて、東京帝国大学卒業後直ちに中央の官途につかれた同氏が、正の初期ごろ帰郷し居住せずとも、郷土をひそかに指向していたと、判断できる材料である。それは、正3年創刊の「筑紫史談」第1号(註5)の会員名簿で、山田新一郎 東京市赤坂区新坂町32(前鳥取県知事・法学士)とある。ついで同誌11・12号(正5～6年)に、「福岡易儲遺聞」と題する論文を発表している(註6)。考古学とは全く無関係の研究をなしつつ、かたや郷土の出土文物に興味を示すという、かなり巾広い視野が察知される。また年次が一致している点も、興深い。同氏の年譜(註7)は作製されており経歴・

業績などについては正確に知ることはできるが、上記の諸点については、ふれることがない。その後、考古学の方には、傾斜されなかったのではあるまいか。昭和21年83歳で他界された。

4 結 語

以上を要約して、下記の結語にかえる。

- ①図譜の著者について、さきの拙文（註1）において、小川敬養氏をもってその疑いが濃いつとしたが、渡辺正気氏教示のごとく、別人の可能性が強いことをのべた。
- ②山田新一郎氏資料は、新発見である。同氏は知名の士であるが、さすがに旧秋月藩出身の人士だけあって、大正5年(1916)という比較的早い時機に、考古学の分野にも興味を示していたことは、同氏を知る上にも貴重である。朝倉地方に限定すれば、先達中山平次郎、坂本真鈴氏などよりも早いことを指摘した。

執筆に際して、井上 忠・筑紫 豊・田辺正彦・斎藤 豊・板橋旺爾・宮本 聡・中村十生氏をはじめ九大考古学研究室各位の教示と指導を得、福岡市立歴史資料館長石橋博氏、後藤直氏の御高配を得た。深謝申し上げる。

山田新一郎氏資料については、田辺正彦・井上 忠・筑紫 豊氏と相談の結果、山田氏ゆかりの地である秋月郷土館に寄贈した。

註1 三島 格「館蔵本・豊前筑前其他出土考古品図譜解題」 福岡市立歴史資料館研究報告3 1979年 福岡。

註2 ①小川敬養「豊前国田川郡松吉村横穴探究記」東京人類学会雑誌 3-29 明治21年 東京。

②同「豊前国塚穴より出せるガラス製及土製人形の説明」同上誌 3-29。

③同「豊前国仲津郡発見の貝輪」同上誌 5-49 明治23年。

④同「古代斧及鏃」同上誌 5-51 明治23年。

⑤同「豊前の貝輪寸法」同上誌 5-53 明治23年。

⑥同「祝部土器ノ腹部ニアル小孔ニ就テ」同上誌 5-54 明治23年。

⑦同「耳のある古墳土器」同上誌 6-64 明治24年。

⑧同「豊前国企救郡藍島の古墳」同上誌 6-66 明治24年。

⑨同「古墳墓発見の長大なる直刀」同上誌 7-68 明治24年。

⑩同「豊前の石斧」同上誌 7-71 明治25年。

⑪同「豊前国企救郡石器時代遺跡」同上誌 8-90 明治26年。

⑫同「豊前国石世遺跡」同上誌 9-96 明治27年。

⑬同「豊前小倉近傍の石剣」同上誌 9-98 明治27年。

⑭同「豊前に産する曲玉の種類」同上誌 10-107 明治28年。

⑮同「輪形の耳ある古墳土器」同上誌 10-113 明治28年。

註3 中山平次郎「太刀洗飛行場発見の石剣 附 大川附近出土の磨製石鏃に就て」考古学雑誌 11-7 大正10年 東京。

註4 坂本真鈴「朝倉通信①」考古学雑誌 16-5 大正15年 東京。

- 註5 「筑紫史談」1 P.100 大正3年 福岡。昭和44年覆刻。
- 註6 山田新一郎「福岡易儲遺聞」上 筑紫史談11 大正5年 福岡。
山田「福岡易儲遺聞」下 同上誌12 大正6年 福岡。
- 註7 「山田新一郎・山田テヲ追想録」私家版。① 山田氏は、元治元年（1864）生れ昭和21年没。② 本籍 福岡県朝倉郡三輪町弥永1275（現田辺氏宅）。③ 雅号を鉄崖という。

大正十四年

福岡縣朝倉郡三輪村久光 佐一 氏
と 久光 氏 堀

翠鈴



図1. 山田新一郎資料(一) 1916年

朝倉部牧經時大字吹田に、野井、所
 出、其、以、
 吹田の古墳より石棺出土したと度々言

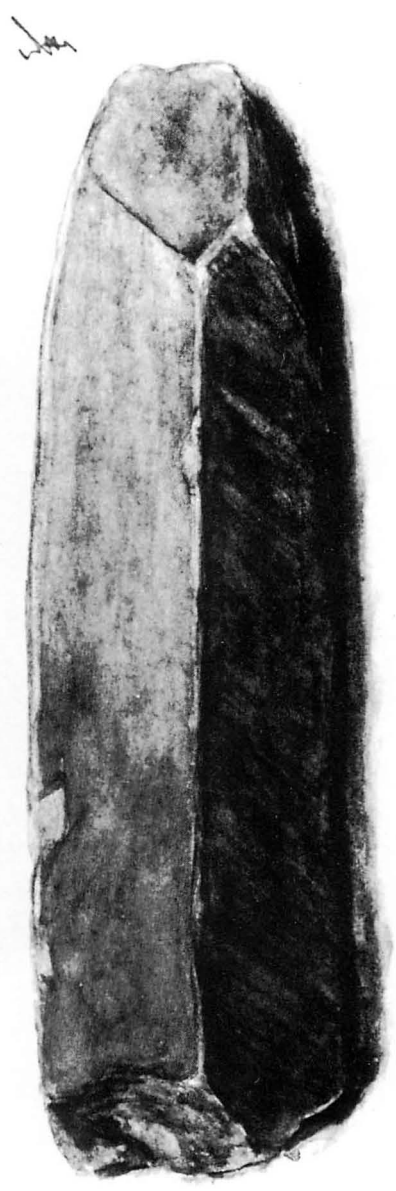
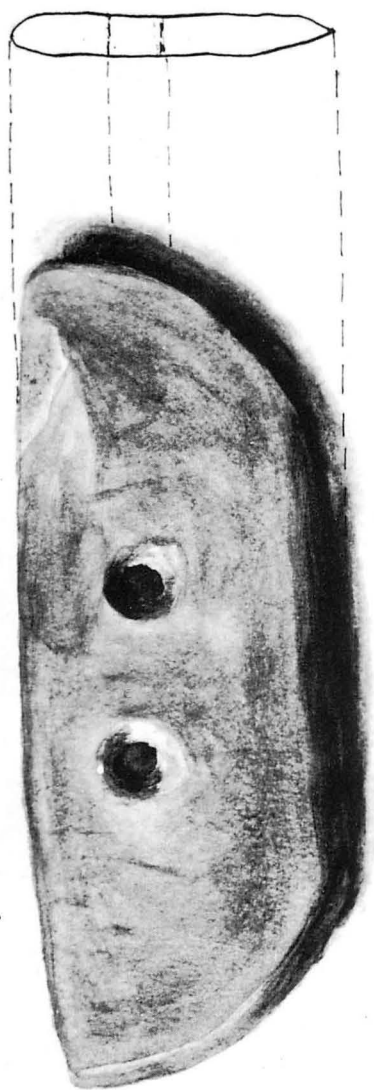
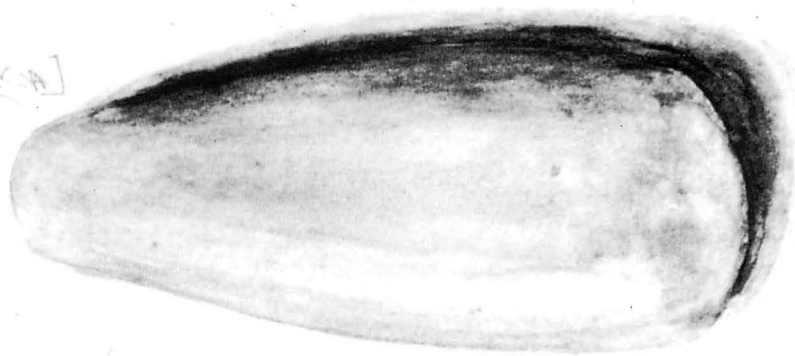


図 2. 山田新一郎資料 (二) 1916年

此三品は福岡縣新田村大字松尾、湖池の側の突出部
 平地より出づ（此文には大字松尾とあり）



文相



文相

所布者

柳金野 雲牙田

石 庵 聖
に 方

藤 氏
重 隆
重 隆

有 幸
夜 須
朝 倉
村 部

福 岡 縣

此 三 品

松 池 側 突 出 部 一 半 地 方 出
此 處 係 大 塚 牙

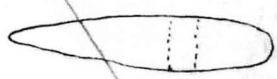
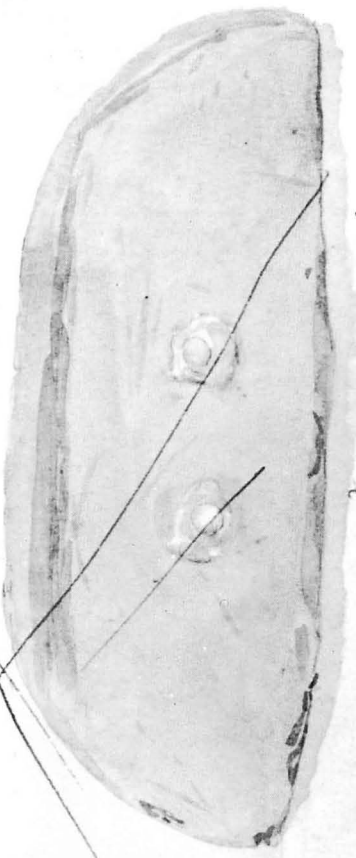
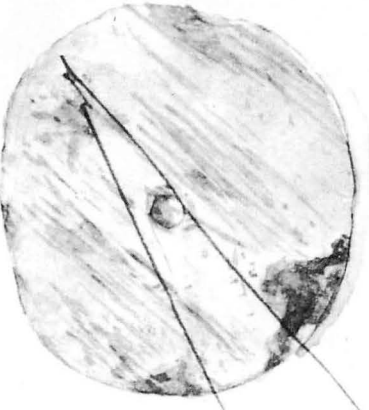


図 4. 山田新一郎資料 (図 3 の裏) 1916年